

第31回中世哲学会大会シンポジウム報告

論題：アウグスティヌスにおける 歴史の問題

司会 慶応義塾大学 神山四郎

提題：アウグスティヌスの終末論と中世思想

慶応義塾大学 坂口昂吉

提題：「時間の秩序」と歴史の解釈

岡山大学 金子晴勇

提題：『神国論』におけるアウグスティヌスの歴史理解

上智大学 K. リーゼンフーバー

(於 聖心女子大学 1982. 11. 21)

司会

神山四郎

本年度のシンポジウムのテーマは「アウグスティヌスにおける歴史の問題」である。提題者三氏はそれぞれの立場からアウグスティヌスの歴史観のいくつかの問題を明らかにした。三氏はそれぞれアプローチは違うが意見に大きな食い違いがないため、互いに論争は起こらなかったが、参会者との間に活発な質疑応答が交わされて意義あるシンポジウムであった。

三氏の論旨を簡単に述べると、まず歴史家の坂口昂吉氏は、思想史の観点からアウグスティヌスの終末論の形体の時代的性格を指摘した。アウグスティヌスはまずオリゲネス主義を退けることによって新プラトン派の歴史循環論の名ごりを払拭したが、他方キリスト教黙示文学に由来する Chiliasm を否定することによってその未来主義を放棄した。アウグスティヌスは天地創造からキリストまでの歴史を三時代に区分しているが、その第三の時代はキリスト降誕から世の終わりまでとして、それを地上における最後の時代と考えていた。この時代で時みちて終末への準備は完了し、それ以後の新しい時代を想定しなかった。この終末意識は中世前期にはその

まま受けつがれたが、12世紀頃から思想家たちは、千年王国とは言わないまでも、未来になんらかの地上の新時代を予想していた（フローラのヨアキムがキリストの時代のあとに聖霊の時代の到来を予告したような）。これは Chiliasm を浄化したようなかたちで新時代の現実に対応するものであったが、アウグスティヌスの終末論はその点で中世盛時の歴史意識とは違い、それだけ近代に遠いものだった。

次に哲学者の金子晴勇氏は『神国論』を中心に「時間の秩序」からアウグスティヌスの歴史観を解釈した。まず被造界は時間とともに創られたのだから、世界存在は時間存在である。しかしその時間は物理的時間であって（その点でギリシャ風の円環を破りはしたが）、文化的時間ともいべき歴史時間は、歴史を超越した神の知恵のなかにある理念が歴史のうちに実現してゆく「発展過程」としてとらえられている。それはちょうど絵巻物をひろげていくように展開するものである。その直線的な展開が時間の経過によって神の言葉と受肉による救済史の諸段階を成すのである。神の知恵においては過去の事実と未来の予言は区別がないから、アウグスティヌスはこの世の出来事の記述を靈的に解釈し、それを未来のより完全なより偉大な事実の型として理解する予型論的解釈を成り立たせている。そして歴史の究極の目標は「秩序の静けさ」としての平和であり、それは神の「時間の秩序」によって死の時間から人間を解放する一つの大きな歴史ドラマである。

最後に神学者のK. リーゼンフーパー氏は、アウグスティヌスが『神国論』において因果の閉じられた過去のくりかえしを説くローマの歴史像を打破り、キリストによる開かれた終末的完成を説いている歴史解釈を形而上学的・神学的に解明する。まず時間は一直線上に亡びに向くと同時に永遠に向ってのり越えられる両義性をもっているから、行為の決定は人間の自由に任される。時間の創造者であり管理者である神は歴史の担い手であり遂行者である。このように神は歴史の主体であるから歴史には三位一体的統一があらわれる。しかし人間にとっては歴史は未来に開かれた未決定性であり、それは歴史の中のさまざまな対立に示されている。その対立は身体的には死への老化と永遠の生への新生の緊張にあらわれているが、社会的には戦争と平和といったさまざまな葛藤に表われている。だがそれはマ=教的な善悪二元論ではなく、悪は善への志向の、結局は神を享受するための手段と考えられている。しかし歴史は結局個人の手では成し遂げられず、「国」によって果たされ

るが、その国とは内在と超越、時間と終末の緊張関係をもっていて、単純に可視的な教会や国家とは同一視できないが、キリストを規範とする霊的共同体である。

提題

アウグスティヌスの終末論と中世思想

坂口 昂吉

アウグスティヌスはその終末論において互いに相異なる二つの立場に対決していた。その一つはオリゲネス主義であり、善悪すべての被造物の神への還元を説くと共に、少くとも精神的諸存在者については神からの永遠なる生成と回帰を説いていた。これは新プラトン派的な永劫回帰の歴史観のキリスト教内における残滓であり、克服さるべきものであった。第二にアウグスティヌスが対峙したのは、Chiliasmusであり、キリスト再臨から千年にわたる聖徒たちの平和が続いた後、初めて天上への帰還という真の世の終りが到来する、という主張であった。これは末期ユダヤ教およびキリスト教の黙示文学に源流を発するものである。

まずアウグスティヌスとオリゲネス主義との対決について論じたい。彼は当初、この問題の内蔵する重大性に気付いていなかったらしく、397年の直前、ヒエロニムスがルフィヌスのオリゲネス主義を非難して論争が起った時に大変衝撃を受け、『書簡73』3章6節にその痕跡がうかがえる。けれども彼は後年、オリゲネス主義的傾向の背後にひそむキリスト教的歴史観との背理を明確に悟り、やがてヒエロニムスや他の教父たち以上にその謬説を断罪するに至ったのである。413年以降に書かれた『神の国』21巻17章で彼はのべている。「オリゲネスは、悪魔の頭 (diabolus) と彼の天使たちもその業に適わしくより重く長い刑罰の後、その苛責から解放され、聖なる天使たちの仲間に入れられるべきだと考えたのである。教会が彼を断罪したのは誠に適わしい。それは上述の主張や他の幾つかの誤謬のため、また特に幸福と不幸の絶え間ない交代と、一定の時間において幸福から不幸へ、また不幸から幸福へと永久に循環が生ずるとする説のためである」。なおかかるアウグスティヌスの適確な弾劾は、教皇アナスタシウス一世によるルフィヌス及びオリゲネスに反